

学術論文

日本留学中の日本語学習者の文法テスト正答率は どのように推移するか

—大学の学部留学生における一考察—

中 原 郷 子 ・ 安 田 眞由美

【学術論文】

日本留学中の日本語学習者の文法テスト正答率はどうのように推移するか

—大学の学部留学生における一考察—

中 原 郷 子 ・ 安 田 眞由美

In this study, 44 native Chinese speakers (hereinafter referred to as “Chinese NS”) and 13 native Korean speakers (hereinafter referred to as “Korean NS”) who were studying at the undergraduate level in a Japanese university were tested on their grammatical and lexical knowledge of Japanese (based on levels N5-N1 of the Japanese Language Proficiency Test), thrice, at regular intervals in order to investigate how the total rate of correct answers and the correct answer rate by difficulty level changed, and whether the patterns in the changes differed according to the native language of the learner. As a result, in terms of the total correct answer rate, for Chinese NS, a U-shaped result was observed across tests 1, 2, and 3, whereas for Korean NS, the scores grew progressively higher across tests 1, 2, and 3. In addition, looking at correct answer rate by the difficulty level of the questions, for Chinese NS, a U-shaped curve was observed in the N4 and N5 levels, while the scores were highest in test 3 of the N2 and N1 levels. Among Korean NS, the only level in which the highest scores were observed in test 3 was for the N4 level.

キーワード：日本語文法テスト、得点推移、中国語母語話者、韓国語母語話者、留学期間

1. 背景・目的

日本政府は2008年、留学生30万人の受入れを目指す「留学生30万人計画」を策定し、文部科学省をはじめとした関係省庁や機関などが連携して、大学等の教育機関や社会における受入れ体制の整備などを積極的に推し進めてきた。その結果、日本国内の外国人留学生数は年々増加し、日本学生支援機構の「2019（令和元）年度外国人留学生在籍状況調査結果の公表」によると、2019年5月1日現在の留学生数は312,214人（前年度比13,234人（4.4%）増）で、2020年を目途に30万人の受け入れを目指す「留学生30万人計画」は、その前年となる2019年に達成された。2019（令

和元)年度の外国人留学生の在籍機関別の内訳を見ると、312,214人のうち大学・短期大学等の高等教育機関に在籍する外国人留学生数は228,403人(前年度比19,502人(9.3%)増)で、日本学生支援機構が外国人留学生在籍状況調査を開始した2004(平成16)年度以降で最も多い数となった。翌年の2020年は、世界中で新型コロナウイルスの感染が拡大し、留学生の日本への入国も制限されたため、2020(令和2)年5月1日現在の外国人留学生数は279,597人(前年比32,617人(10.4%)減)で、そのうち大学・短期大学等の高等教育機関に在籍する外国人留学生数は218,783人(9,620人(4.2%)減)となったが、依然として多くの外国人留学生が日本国内の大学等の高等教育機関で学んでいる。

このような状況の中、文部科学省は2021(令和3)年4月、「外国人留学生の適切な受入れ及び在籍管理の徹底等について」という通知において、「外国人留学生の入学者選抜に当たっては、(中略)特に日本語等の必要な能力の基準(日本語で授業を行う場合、日本語能力試験N2レベル相当以上が目安)を明確化し、適正な水準を維持することが重要です。」としている。この通知は、2020(令和2)年6月に出された「令和3年度大学入学者選抜実施要項」に基づいて発令されており、出入国在留管理庁のホームページ「日本語教育機関への入学をお考えのみなさまへ」の中でも「日本語教育機関修了後、高等教育機関(大学、専門学校)へ進学する場合には、日本語で行われる授業を理解するため、N2以上の日本語能力が求められます。」と明記されている。つまり、日本の大学の学部で学ぶ場合、入学前に初級、中級レベルの日本語を学習し、N2レベル相当以上の日本語力をつけることが求められている。そして、入学した後も日本語学習を継続し、日本語能力試験(以下、JLPT)N2やN1合格を目指して、対策授業を履修している学習者も少なくない。このような日本語学習者が日本の大学に入学する前、すでに自分の国、もしくは日本国内の日本語教育機関で学習した初級や中級レベルの文法知識やN1レベルの文法知識は、日本の大学に入学後、何が、どの程度、どのような過程を経て変化するのだろうか。

これまで、日本語学習者の日本語能力の測定に、JLPTが最もよく活用されてきた。学習者本人も日本語学習の進捗状況を測る一つの手段としてJLPTを受験し、日本語教育に携わる教師や留学生を採用する企業の担当者も、JLPTの結果を日本語学習者の日本語能力の目安とする場合は多い。しかし、その一方で、日本の大学の学部に留学中の日本語学習者を対象としたJLPTで測られるような「課題遂行のための言語コミュニケーション能力」の「言語知識(文法)」がどのように変化していくのか、縦断的に調査した研究はほとんど行われておらず、未だ明らかではない。

第二言語習得究の分野において、学習者の言語発達は目標言語体系に近づくために一直線に発達するのではなく、U字型の行動の発達(U-shaped behavioral

development: Kellerman, 1985) (以下、U字型発達) をすることが広く知られている。Kellerman (1985) は、言語学習の第1段階 (ステージ1) では、学習者は目標言語の基準に一致し、エラーがなく、第2段階 (ステージ2) では目標言語の基準から逸脱、第3段階 (ステージ3) で再び目標言語の基準に戻ると述べている。これを第二言語学習の具体的プロセスに当てはめると、学習の初期段階では、学習者は新たに学習した項目を定型表現として使用するので誤用が少ないが、その後学習が進み、目標言語との接触が増えると定型表現にはない形式に多く触れることになり、知識の再構築、つまり分析をし直して新たな知識体系に入れ込むことが必要になり、その間は誤用が増える。しかしその後、再び新たなルールを適用した「かたまり」として目標言語知識を利用できるようになるので、正用が増え、習得へとつながる (小柳, 2004)。Shirai (1990) は、動詞“PUT”の潜在的な意味 (語彙境界) に関する学習者の知識を確認するために、英語習熟度別に分けた日本人3グループ (高校1年生、高校3年生、大学の英語専攻の学生) と英語母語話者 (アメリカの大学の応用言語学の学生と教職員) を対象に、“PUT”が用いられている20文それぞれの受容性を7段階で判断するテストを実施した。その結果、いくつかの項目でU字型発達と見られる現象が観察されたこと、U字型発達はすべての項目で見られるのではなく、限定的であること、学習者の母語と学習言語が類似している場合には非典型的な「正の転移」として観察される傾向があることを明らかにした。田丸ほか (1993) は、6名の成人日本語学習者を対象に、同一の絵の描写の発話に現れる文の構造を数量的に分析し、中間言語の縦断的变化を観察した。その結果、学習初期の頃より学習のより進んだ段階では、長い文や複雑な文を作ることができるが正確さが落ちたことを報告し、これはU字型発達に関連している可能性があるとして述べている。また、Morita (2004) は、4つの日本語能力グループ (中級Ⅰ、中級Ⅱ、上級Ⅰ、上級Ⅱ) の学生を対象に、自他対応動詞の習得において動詞の種類 (自動詞と他動詞) がどのように影響しているかを調査している。その結果、中級Ⅱのグループは、一般的には中級Ⅰのグループよりも日本語能力が高いにもかかわらず、中級Ⅰと中級Ⅱグループ間のテスト結果に有意差は見られなかった (中級Ⅰのスコアが中級Ⅱより高い) と報告し、中級Ⅱのスコアが低かったことについてはU字型発達を反映していると考えられると述べている。Shirai (1990) や Morita (2004) の調査では、U字型発達が見られる要因の一つとして、instructional effect (教示効果) の影響が挙げられている。例えば、学習してからの時間の経過の長短や、教室等で触れる頻度、学習機会の有無の差が結果に影響を与えた可能性を指摘している。さらに、安田・中原 (2020) は、日本の大学に留学中の日本語学習者を入学時期ごとに2つのグループに分け、日本語文法と語彙の知識を問うテストを継続的に実施した結果、日本語習熟度の異なる群の間で、多少の差は

見られるものの、テストの正答率が上がった時期はどちらのグループも入学後2学期目の終わりであったと報告し、目標言語環境に身を置いている場合は、1年程度で知識が再構築される可能性があるとして述べている。

以上をふまえ、本研究では、母国で1年～3年日本語を学んだ後、日本の大学の学部で留学中の日本語学習者を対象に、一定期間ごとに日本語文法と語彙の知識を問うテスト（JLPTのN5～N1に準拠）を3回行い、そのうちの文法テストの総正答率（以下、総正答率）及び問題のレベル別正答率がどのように変化するか、また、学習者の母語により変化のパターンが異なるかを縦断的に調査した。

2. 方法

2.1 調査参加者

20××年春学期と秋学期にA大学に1年次入学または3年次編転入学（以下、入学）した学部留学生57名であった。調査参加者の各内訳は次の通りである。母語別内訳は、中国語母語話者（以下、中国語NS）44名、韓国語母語話者（以下、韓国語NS）13名、入学年次別内訳は、1年次15名、3年次42名、男女別内訳は、男性25名、女性32名であった。いずれの調査参加者も、入学前に自分の国で1年～3年、日本語を勉強している。JLPTのN5～N1に準拠した入学時のプレイスメントテストでは、76点満点中、29点が1名、30～39点が8名、40～49点が26名、50～59点が14名、60～69点が7名、70点が1名であった。入学後、調査参加者はプレイスメントテストの結果により振り分けられた四技能別の日本語の授業やJLPTのN1、N2合格を目指した授業、その他、教養科目や専門科目を履修していた。

また、調査開始前に、調査目的と方法、個人データの取り扱いについて説明され、この調査への参加は任意であること、不参加でも不利益を被ることがないこと、不都合が生じた場合はいつでも参加を取り消すことができること、これを理解し同意する場合のみ、調査参加同意書の書面に署名するよう伝えられた。

2.2 材料と実施時期

調査では、同じ問題構成の3つのテスト（テスト1～3）を使用した。テストは、JLPTのN5～N1レベルの文法問題とN3～N1レベルの語彙問題で構成されており、N5、N4レベルの文法問題については、『みんなの日本語 初級Ⅰ本冊』、『みんなの日本語 初級Ⅱ本冊』から抜粋して作成し注1、N3～N1レベルの文法問題については『日本語バワードリル』N3～N1（松浦, 2011）、『日本語総まとめ』N3～N1（佐々木・松本, 2010）から抜粋して作成した。語彙問題については、文脈規定と用法に

について出題し、それぞれ『日本語パワードリル 文字・語彙』N3～N1（松浦・鈴木，2010; 2011）から抜粋し、作成した。テスト1～3の合計問題数と文法と語彙の問題数は次の通りである。途中、問題数の見直しを行ったため、テストの実施時期によって問題数が異なっている。テスト1（以下、T1）は合計76問（文法54問、語彙22問）で実施、テスト2（以下、T2）とテスト3（以下、T3）は合計76問（文法54問、語彙22問）で実施した時と合計100問（文法63問、語彙37問）で実施した時がある。文法問題のレベル別内訳は、文法問題が54問の場合、N5レベル10問、N4～N1レベル各11問、63問の場合、N5レベル10問、N4レベル11問、N3～N1レベル各14問である。それぞれのテストの実施時期は、T1が入学直後、T2が入学7～8か月後、T3が入学10～11か月後であった。また、テスト受験後、日本語の使用状況や頻度に関するアンケート調査を実施し、テスト結果の分析の参考とした。

2.3 手続き

解答はすべてマークシートに記入するよう指示された。解答時間は、合計76問のテストは45分、合計100問のテストは60分であった。

3. 結果

表1に各テストの総正答率および問題レベルごとの平均正答率を、図1から図6に母語・問題レベル別正答率の推移を示す。

テストによって問題数が異なったため、分析には正答率を角変換した値を用いた。総正答率および各問題レベルの正答率が3つのテストでどのように変化したか調べるため、母語別にテスト時期を独立変数、正答率を従属変数として1要因分散分析を行った結果（本研究では有意水準を5%に設定した）、中国語NSでは総正答率、N5からN1全てで主効果が有意であった（総正答率： $F(2,86)=34.45, p=.000, \eta^2=.11$ 、N5： $F(2,86)=31.44, p=.000, \eta^2=.24$ 、N4： $F(2,86)=36.62, p=.000, \eta^2=.22$ 、N3： $F(2,86)=13.04, p=.000, \eta^2=.09$ 、N2： $F(2,86)=14.95, p=.000, \eta^2=.12$ 、N1： $F(2,86)=21.48, p=.000, \eta^2=.17$ ）。多重比較の結果、以下のことが明らかとなった。すなわち、a) 総正答率においてT3がT1 ($t(86)=3.65, p=.000, r=.37$)、T2 ($t(86)=8.28, p=.000, r=.67$) より正答率が高いこと、T1がT2 ($t(86)=4.63, p=.000, r=.45$) より正答率が高いこと、b) N5の平均正答率においてT1がT2 ($t(86)=7.83, p=.000, r=.65$)、T3 ($t(86)=2.85, p=.006, r=.29$) より正答率が高いこと、T3がT2 ($t(86)=4.99, p=.000, r=.47$) より正答率が高いこと、c) N4の平均正答率においてT3がT1 ($t(86)=3.30, p=.001, r=.34$)、T2 ($t(86)=8.49, p=.000, r=.68$) より正答率

表 1 母語ごとの平均正答率 (%) (() 内は標準偏差)

		テスト 1	テスト 2	テスト 3
中国語 NS n=44	総正答率	66.69 (12.08)	60.63 (13.25)	71.23 (11.56)
	N5	91.04 (10.13)	76.91 (13.40)	87.27 (10.08)
	N4	82.18 (15.26)	68.63 (18.61)	89.05 (11.06)
	N3	73.66 (17.49)	70.69 (15.89)	62.19 (15.72)
	N2	54.75 (15.87)	52.65 (16.88)	66.26 (17.98)
	N1	36.70 (23.10)	40.07 (18.29)	58.40 (18.69)
韓国語 NS n=13	総正答率	62.58 (13.79)	72.53 (9.71)	75.36 (10.28)
	N5	82.97 (15.23)	87.54 (9.71)	93.08 (6.06)
	N4	71.49 (18.86)	84.86 (8.97)	95.10 (6.78)
	N3	65.38 (23.08)	79.58 (12.42)	72.03 (19.02)
	N2	62.64 (19.24)	56.83 (17.15)	67.83 (21.58)
	N1	46.75 (20.57)	55.28 (18.68)	50.35 (18.74)

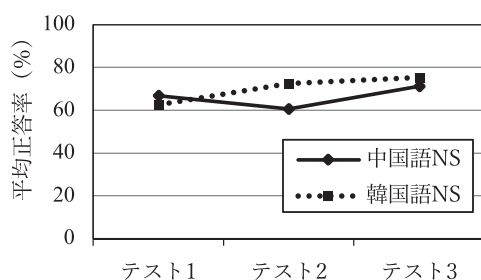


図 1 各母語群における総正答率の推移

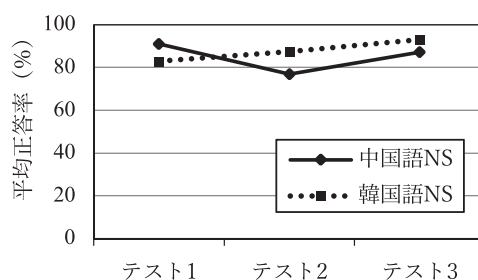


図 2 各母語群における N5 正答率の推移

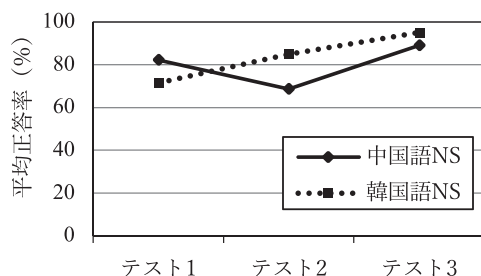


図 3 各母語群における N4 正答率の推移

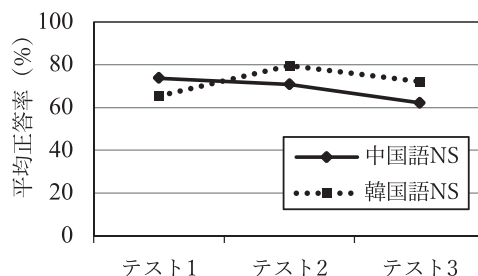


図 4 各母語群における N3 正答率の推移

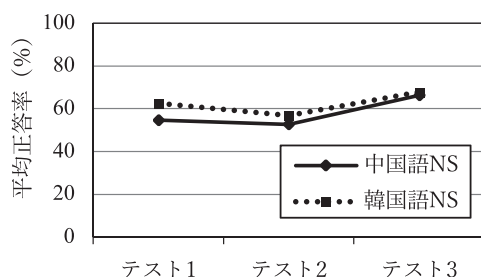


図 5 各母語群における N2 正答率の推移

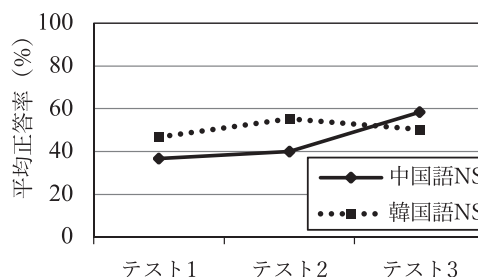


図 6 各母語群における N1 正答率の推移

が高いこと、T1がT2 ($t(86)=5.19, p=.000, r=.49$) より正答率が高いこと、d) N3の平均正答率においてT1がT3 ($t(86)=5.01, p=.000, r=.48$) より正答率が高いこと、T2がT3 ($t(86)=3.35, p=.001, r=.34$) より高いこと、T1とT2 ($t(86)=1.66, p=.100, r=.18$) の正答率には差がないこと、e) N2の平均正答率においてT3がT1 ($t(86)=4.38, p=.000, r=.43$)、T2 ($t(86)=5.03, p=.000, r=.48$) より正答率が高いこと、T1とT2 ($t(86)=0.65, p=.518, r=.07$) には差がないこと、f) N1の平均正答率においてT3がT1 ($t(86)=6.08, p=.000, r=.55$)、T2 ($t(86)=5.16, p=.000, r=.49$) より正答率が高いこと、T1とT2 ($t(86)=0.92, p=.363, r=.10$) には差がないことが明らかとなった。韓国語NSでは総正答率、N4の主効果が有意であった（総正答率： $F(2,24)=8.50, p=.002, \eta^2=.17$ 、N5： $F(2,24)=1.74, p=.197, \eta^2=.09$ 、N4： $F(2,24)=20.62, p=.000, \eta^2=.44$ 、N3： $F(2,24)=1.04, p=.369, \eta^2=.05$ 、N2： $F(2,24)=1.75, p=.195, \eta^2=.07$ 、N1： $F(2,24)=1.10, p=.349, \eta^2=.03$)。多重比較の結果、以下のことが明らかとなった。すなわち、g) 総正答率においてT2がT1 ($t(24)=2.99, p=.006, r=.52$) より正答率が高いこと、T3がT1 ($t(24)=3.95, p=.000, r=.63$) より正答率が高いこと、T2とT3 ($t(24)=0.96, p=.347, r=.19$) には差がないこと、h) N4の平均正答率においてT3がT1 ($t(24)=6.38, p=.000, r=.79$)、T2 ($t(24)=3.85, p=.000, r=.62$) より正答率が高いこと、T2がT1 ($t(24)=2.52, p=.019, r=.46$) より正答率が高いことが明らかとなった。

4. 考察

2つの母語群で、総正答率、N5からN1の各問レベルの正答率の推移のパターンは異なっており、同一母語でも問題レベルによって推移のパターンは異なっていた。

両母語群とも、総正答率のテスト時期の主効果が有意であり、中国語NSではT1からT3にかけて、T3が最も高いU字型の推移となった一方、韓国語NSではT1からT3にかけて正答率が上昇していった（T2とT3の間に統計的な有意差はなし）。

中国語NSのN5、N4では、T2の正答率が最も低く、T1、T3が高かった。最も正答率が高いものがN5ではT1、N4ではT3という違いはあるが、概ねU字型発達を見せており、これは入学後、日本での生活を始めて7～8か月の時期で一度、知識の再構築を行う必要があったことを示唆している。つまり、入学時点では母国で教科書などで学んだ知識を使ってテストに解答したため、高い正答率となったが、入学後は日常生活などを通して様々な生の日本語に接するにつれ、来日前に学んだ知識とのずれに対応することが必要になり、知識の再構築が起こったのではないかと考えられる。N5とN4のパターンの違いについては、日常生活でフレーズとして使うことの多いN4の項目のほうが使用頻度という点からT3の時期に定着が進み、より高い正答率となったこ

とが考えられる。このことは、テスト時に行った日本語使用に関するアンケート調査において「日本人（友達・バイト先の人）と話す」を頻度が高いものとして挙げている調査参加者が約55%（44名中24名）いたことから示唆される。このようなN5、N4のパターンの違いは、N4は日常生活の中である程度正確さが養われていく反面、N5項目に関しては、N4より難易度の低い項目ではあるが、正確な知識の定着という点では日常生活だけでは多少不十分な面があることを示していると考えられる。

韓国語NSのN5、N4では、N4においてのみ有意差が見られ、T3が最も高いことが示された。N5においては、平均正答率がT1からT3のいずれも80%を超えており、天井効果によってテスト時期による正答率の差が生じなかった可能性がある。N4に関しては、T1からT3にかけて正答率が上昇し、T3では平均正答率が95%を超えている。これは、T1の時期には母国で学んだ知識がまだ十分定着していなかったが、日本での生活を通して、母語からの正の転移を利用して効率的に文法知識を習得したことを反映していると考えられる。本研究では母語間での正答率の差は分析しなかったが、T2、T3における両母語群の正答率の値の違いは、韓国語のほうが日本語と文法や語順が類似していることによるものであることが推測される。つまり韓国語NSのN4、N5では、文法知識と語彙の意味境界という対象の違いはあるが、Shirai（1990）で述べられていた学習者の母語と学習言語が類似している場合に起こる、非典型的な「正の転移」が起こっていると考えられる。すなわち、韓国語NSは、日本語に接する機会が爆発的に増える入学後、母語の知識を有効に使って、特に日常生活で使用頻度の高いN4レベルの文法知識を習得できるのではないか。この点については、テストに使用した各項目について中国語、韓国語の文の構造や語順との類似性を調査することで今後、明らかにしたい。

N3については、中国語NSではT1からT3にかけて徐々に正答率が下がり、韓国語NSではT1からT2にかけて一度上昇した後、T2からT3にかけて再び下降している。N3の項目は、大学の授業の中で使われることも多いことが推察されるが、本研究の対象となった日本語学習者の中にJLPTのN3を目指して学習する留学生はおらず、取り立ててN3項目の知識を正確にしようと意識することはなかったものと思われる。このような学習態度・意欲が、正確さが求められる文法テストの正答率となって現れたことが考えられる。その一方で、N3の項目について、N5、N4の項目とは再構築が起こる時期が異なる可能性もあるため、引き続き調査を行う必要がある。

調査参加者たちは、A大学で開講されているさまざまな日本語科目を履修していた。その中には、JLPTのN1、N2対策授業もあったため、これらの授業の履修状況を調査したところ、韓国語NSは入学直後の学期に約23%（13名中3名）がN1対策授業を履修していたのみであったが、中国語NSは各テストが行われた学期に約40%（44

名中17名)がN1対策授業を履修していた。このことが、特にN1の正答率パターンが母語別で異なったことに影響していると考えられる。つまり、中国語NSにおいては、対策授業でN1の文法知識を集中的に吸収し、それがテストの得点に反映されてT2からT3にかけての伸びとして現れた可能性がある。しかし、調査参加者の対策授業の履修時期と正答率を詳細に分析したところ、対策授業の教示効果が現れる時期は、履修した学期終了時点や履修次学期初めのテストではなく、半年程度の時差が見られた。この時期のずれには、JLPT対策授業をいつ履修したかより、JLPTをいつ受験したかのほうが影響を及ぼしている可能性もあるが、受験時期については調査対象者全員の情報を詳細に把握できていないため、今後の調査では収集する情報に含め、考察の一助としたい。他方、韓国語NSでは中国語NSのように、集中的にN1文法を学ぶような学習環境になく、入学時点で持っているN1文法についての知識を大きく変化させるような教示効果を得る機会がなかったため、N1の正答率としてはわずかな変動しかなかったと考えられる。特に、N1文法は、その使用場面が日常生活にはないため、大学の講義を含む授業の中でも触れる機会がほとんどなく、対策授業というその知識を学ぶことを目的とした特殊な場面で意識的に学習することでしかその知識量を増やし、定着させることは難しいことが示唆された。また、N2の項目に関しては、対策授業を履修した調査参加者はN1ほど多くなく、各テスト時期で中国語NSは10%程度(1~6名)、韓国語NSは1人もいなかったが、T3の時期に正答率が上がっている(ただし韓国語NSは有意ではない($p=.28$))。これは、N2の項目は大学の講義や配布資料などで触れることが多く、特に、レポート作成においてはいわゆる「書き言葉らしい日本語」として使われる頻度が高いことから、自然なインプットとして大学生活を通して明示的また暗示的に習得される機会が多く、それが正答率の推移に結びついたと考えられる。このことは、調査参加者へ偶発的に行ったインタビューにおいても同様のコメントが得られた。この点に関しては、今後さらなるデータの蓄積・継続的な分析を通して、幅広い日本語学習者において同様のことが言えるのか検討する必要がある。

5. 教育的示唆と今後の課題

本研究では、日本の大学に留学している中国語NSと韓国語NSを対象に、JLPTで問われるような日本語文法の知識が留学期間を通してどのように変化するかを検討した。その結果から得られた教育的示唆としては、次のようなものが挙げられる。(1)中国語NSにおいては、N5のような難易度がそれほど高くない項目も、正確な知識を維持するためには、定期的な確認・修正が必要であること、中国語NS、韓国語NS

ともに、(2) N3の項目は、日常生活や大学生活で触れる頻度は高いが、N1、N2のように集中して身につける機会を作らない場合が多いので、正確さを高めるには、意識的に学び、確認する必要があること、(3) N2の項目は、大学で履修している授業を通して自然なインプットとして触れる機会が多く、レポートなど自分で正しさを確認できる場面での使用が多いため、「使いながら学ぶ」ということが比較的容易であること、(4) N1の項目は、使用場面が限定的で、日常的に触れる機会がほぼないため、JLPTのN1取得を目指す場合は、集中的かつ意識的に学ぶ環境を作ることが必要である。今後の課題としては、母語別、問題レベル別の正答率の変化をもたらし要因や文法項目別の変化について、引き続き継続的に調査を実施し、留学期間が延びると何がどのように変化するのも含めて、明らかにすることが挙げられる。特に文法項目に関しては、JLPT各レベルの中には、多様な項目が含まれているため、どのような項目が習得が早いのか、留学生活中の日本語の使用場面、使用頻度、使用目的との関連を明らかにすることで、日本に留学しているものの日本語の使用にあまり積極的でない学習者に、日本語を使用することの具体的な効果を示すことができ、学習意欲を向上させる一助とすることもできるのではないだろうか。

注

- 1 N5・N4レベルの問題について、日本語能力試験の問題集から抜粋して問題を作成するには問題数不足であったため、旧日本語能力試験の文法問題の出題基準を確認した上で、『みんなの日本語 初級Ⅰ本冊』『みんなの日本語 初級Ⅱ本冊』から抜粋して、独自に作成した。

参考文献

- 金恩愛：日本語と韓国語の名詞についての研究ノート，福岡県立大学人間社会学部紀要，25(1)，pp.43-39. (2016)
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会：日本語能力試験JLPT，4つの特徴，<https://www.jlpt.jp/about/points.html>，2021年8月18日閲覧
- 小柳かおる：日本語教師のための新しい言語習得概論，スリーエーネットワーク(2004)
- 佐々木仁子・松本紀子：日本語総まとめN1文法，アスク(2010)
- 佐々木仁子・松本紀子：日本語総まとめN2文法，アスク(2010)
- 佐々木仁子・松本紀子：日本語総まとめN3文法，アスク(2010)
- 出入国在留管理庁：日本語教育機関への入学をお考えのみなさま<http://www.moj.>

- go.jp/isa/publications/materials/nyuukokukanri07_00159.htm, 2021年4月25日閲覧
- スリーエーネットワーク：みんなの日本語 初級Ⅰ第2版, スリーエーネットワーク (2012)
- スリーエーネットワーク：みんなの日本語 初級Ⅱ第2版, スリーエーネットワーク (2013)
- 田丸淑子・吉岡薫・木村静子：学習者の発話に見られる文構造の長期的観察, 日本語教育, 81号, pp.43-54. (1993)
- 独立行政法人日本学生支援機構：019（令和元）年度外国人留学生在籍状況調査結果の公表, <https://www.jasso.go.jp/about/information/press/jp2020042301.html> (2019), 2021年4月25日閲覧
- 独立行政法人日本学生支援機構：2020（令和2）年度外国人留学生在籍状況調査結果, https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2021/04/date2020z.pdf (2021), 2021年4月18日閲覧
- 独立行政法人日本学生支援機構：2020（令和2）年度外国人留学生在籍状況調査等結果の公表について, <https://www.jasso.go.jp/about/information/press/jp2021033001.html> (2021), 2021年4月25日閲覧
- 堀江薫：日本語と韓国語の文法化の対照一言語類型論の観点から一, 日本語の研究, 1(3), pp.93-107 (2005)
- 松浦真理子（監修）・アスク出版編集部（著）：日本語パワードリルN1文法, アスク (2011)
- 松浦真理子（監修）・アスク出版編集部（著）：日本語パワードリルN2文法, アスク (2011)
- 松浦真理子（監修）・アスク出版編集部（著）：日本語パワードリルN3文法, アスク (2011)
- 松浦真理子・鈴木健司（監修）・アスク出版編集部（著）：日本語パワードリルN1文字・語彙, アスク (2010)
- 松浦真理子・鈴木健司（監修）・アスク出版編集部（著）：日本語パワードリルN2文字・語彙, アスク (2010)
- 松浦真理子・鈴木健司（監修）・アスク出版編集部（著）：日本語パワードリルN3文字・語彙, アスク (2011)
- 文部科学省：留学生「30万人計画」骨子, https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afieldfile/2019/09/18/1420758_001.pdf (2008), 2021年4月18日閲覧
- 文部科学省：令和3年度大学入学者選抜実施要項, https://www.mext.go.jp/a_

menu/koutou/ senbatsu/mxt_kouhou0220200619_1.pdf (2020), 2021年4月 25
日閲覧

文部科学省：外国人留学生の適切な受入れ及び在籍管理の徹底等について（通知），
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1325305.htm (2021), 2021年
4月18日閲覧

安田真由美・中原郷子：日本語学習者における日本語文法・語彙テストの得点に関する縦断的研究—日本の大学に留学している留学生のケースを通して—長崎外大論
叢，第24号，pp.57-67. (2020)

Kellerman, E.: If at first you do succeed . . . In S. Gass & C. Madden (Eds.), Input in
second language acquisition, pp.345–353. Newbury House (1985)

Morita, M.: The Acquisition of Japanese Intransitive and Transitive Paired Verbs by
English- Speaking Learners: Case Study at the Australian National University, 世界
の日本語教育, 14号, pp.167-192. (2004)

Shirai, Y.: U-shaped behavior in L2 acquisition. In H. Burmeister & P. L. Rounds (Eds.),
Variability in second language acquisition: Proceedings of the Tenth Meeting of the
Second Language Research Forum, Vol. 2, Eugene, OR: Department of Linguistics,
University of Oregon, pp. 685-700. (1990)